

水辺の 生物



アジメドジョウ

コイ目ドジョウ科アジメドジョウ属

写真・情報提供
岐阜県河川環境研究所

かつてシマドジョウと同一種とされていた本種は、昭和12年(1937年)に初めて丹羽彌博士^{にわ ひさし}により新種として発表され、その後昭和38年には新属のアジメドジョウ属に分類された日本固有の純淡水魚だ。学名は発見者にちなみ'*Niwaella delicata*'。分布は富山、長野、岐阜、福井、滋賀、京都、三重、大阪など、中部および近畿地方に限定されている。

形態・生態ともに他のドジョウとは異なる変り種。たとえば、口は頭部の前方ではなく下方に開いており、唇が分厚い半月形の吸盤状になっている。流れの速い川の上・中流部で流されないよう礫(小さい石)に吸いつき、礫から礫へ伝い泳ぎをする姿が見られる。えさは主に礫に着生している藻類だが、水生昆虫なども食べる。

全長8~12cm。体形は他のドジョウに比べて頭が短く、背びれ、腹びれが体の後方に寄っており、尾までの体幅に変化が少ないので、胴が長く見える。シマドジョウと異なり、胸びれの形に雌雄でほとんど差がなく、外見で雌雄を見分けることは困難。しかし生殖巣が発達する時期はその色が透けて見えるので、メスは腹部が橙色、オスは白色になり見分けがつく。昔から岐阜や長野地域などでは美味として珍重されてきた。

主に河川の上・中流域の平瀬や早瀬にすむ。河床が礫で隠れ場所となる隙間があり、水がきれいで礫表面に藻類が着生し、河原に伏流水があるか、河畔に地下水が染み出ることなどが生息条件だ。伏流水や地下水は、アジメドジョウの越冬、産卵場所として重要。9~11月ごろに伏流水にもぐるが、産卵がこうした場所で行われるため自然界での繁殖行動は目撃されておらず、産卵期も正確には分からない。

アジメドジョウの養殖に取り組んでいる岐阜県河川環境研究所では、飼育環境下で毎年春先に水温が10℃に上がると産出された卵が確認されることから、木曾三川流域の自然環境下でも産卵期は水温が10℃になる頃であろうと推測している。また、卵数も他のドジョウが1000個~5000個に達するのに比して、アジメドジョウは平均100個前後と極めて少ない点も特異。卵数が少なく養殖が難しいアジメドジョウだが、同研究所では発泡スチロールの小片を使って産卵床をつくることで卵を傷つけず、採卵、ふ化に成功している。

参考文献：『あじめ アジメドジョウの総合的研究』丹羽彌著 1976年刊

『日本の淡水魚・山溪カラー名鑑』山と溪谷社 2001年刊